



三和校区の文化財

三和校区は日田市北東部、小野川と市ノ瀬川などが合流した花月川の上中流域にあり、川を中心とした低地には住宅地や水田が広がる田園地帯です。また周りを囲む台地では大規模な畑作が行われ、スイカや梨、冬は白菜の一大産地となっています。校区内を国道212号線が南北に貫き中津市山国町へと続く、日田の北の玄関口でもあります。明治8年に羽野・用松・財津の3村が合併して三和村に、藤山・秋原・台・伏木・市瀬の5村が合併して花月村になり、その2つの村が明治22年にさらに合併して三花村となりました。そして1940（昭和15）年に西有田や高瀬などほかの村などと合併して日田市となりました。現在は清水町や財津町など9つの町で構成されています。

三和校区の歴史の特徴をあげると、まず市内でも最古級の旧石器時代（約3～1万2千年前）の石器が千倉ダムや竜体山などで見つかっています。弥生時代や古墳時代には小学校付近で大規模なムラ（三和教田遺跡）が営まれ、つづく奈良時代には役人の持ち物である円面硯が出土しています。付近には「郡町」「刀根町」などの地名が残り、このころの日田の中心地のひとつだったようです。江戸時代には日田代官所（永山布政所）から中津方面へ向かう幹線道路沿いの村として重要な役目を果たし、今に続いているのです。

知っておきたい文化財

みわきょうだいせき 三和教田遺跡【未指定】

三和小学校のまわりにある遺跡です。運動場そばで行われた発掘調査では、弥生時代（約1800年前）や古墳時代（約1450年前）のムラの跡が見つかっています。

特に弥生時代のムラはまわりを大きな溝で囲み、吉野ヶ里遺跡のような「環濠集落」と考えられています。付近では縄文時代（約3000年前）の土偶も出土しており、古くから人が暮らしていたことがわかります。



三和校区の主な文化財

りゅうりんじもくぞうやくしによらいざそうつけたり りゅうりんじやくしによらいえんぎはんぎ 龍林寺木造薬師如来坐像 付 龍林寺薬師如来縁起版木

【市有文】（財津町）

戦国時代頃、日田盆地の北部を治めていた財津長門守永満は武勇に優れ、戦での手柄も立てましたが、当時の豊後の守護・大友氏の怒りを買って、周防（山口県）に逃れました。そこに霊験あらたかな仏があると聞いて祈願し、罪をゆるされて帰国のときにその仏像を捧げました。その仏像がこの如来像といわれます。像はカヤ造り、高さ83cm。平安時代末期の作で、台座や光背などは後世のものです。将棋盤の裏にこの仏像の由来を彫った版木は1711（明和8）年作です。



三和校区の主な文化財

いしざかいしだたみみち

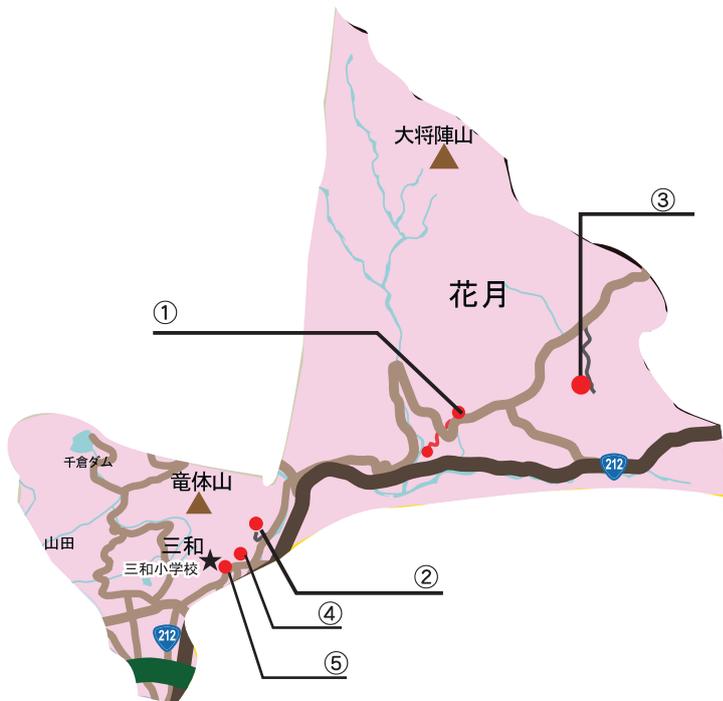
石坂石畳道【県史跡】

(市ノ瀬町・伏木町)

日田代官所（永山布政所）と中津や宇佐四日市陣屋（代官所）を結ぶ江戸時代の往還（道路）の一部で、市ノ瀬町から伏木町の山中にあります。全長1.26km、高低差約200m。石畳は幅約2.2mで、中央には切石を敷き、人や馬が坂道を歩きやすいように2m程度おきに階段がつくられています。



1850（嘉永3）年、隈町の掛屋（幕府などの公金の管理を行う）京屋山田作兵衛常良が通行に苦勞する人馬を見かねて、周防（山口県）から石工を呼んで工事したもので、道中にある廣瀬淡窓によって記された「石坂修治碑」をみると工事のようすがわかります。工事の由来と石畳道が現存する県内唯一の例です。



三和校区の文化財

①石坂石畳道【県史跡】

②龍林寺木造薬師如来像付 龍林寺薬師如来縁起版木【市有文】

③ズミの群生地【市天記】

④古代の区画【未指定】

⑤三和教田遺跡【未指定】

知っておきたい文化財

ズミの群生地【市天記】

(伏木町)

バラ科の木で、春の新緑の時期には赤みを帯びたつぼみを多数つけ、その後白い花が開きます。秋には豆粒ほどの小さな赤い実をつけ、りんごに似ているため「コリンゴ」とも呼ばれます。樹高2～7m、幹まわりは0.3～1m。日本で自生する南限にあたり、30本ほどが群生します。



古代の区画【未指定】

花月川のまわりにひろがる水田は規則正しく方形に区切られ、直線的で直角に交わる道が多く見られます。「条里地割り」と呼び、奈良時代（約1,300年前）以前にさかのぼる土地の区画の痕跡と考えられています。この時代は国家（朝廷）が土地と人民を直接支配しており、一定のきまりにより一人一人に土地を分け与えるために区画をつくったもので、地名に「坪」がつくことが多い場合が多いようです（「大坪」「柳ヶ坪」「郷の坪」など）。





有田校区の文化財

有田校区は日田盆地の北部から東部へ東西に広がる地域で、北側は山地、南側は台地や平地となっており、そこに有田川が東西に流れています。「有田」という名前は、古代日田郡五郷のうちの一つ、「在田郷」に由来します。明治22年の町村制の成立の時に西有田村と東有田村に分かれますが、西有田村は昭和15年に日田町ほか5村と合併して日田市となり、東有田村は昭和30年にほか4村とともに日田市と合併して、現在まで続いています。

有田では1万数千年前からの人々の生活の跡が見られますが、縄文時代から古墳時代にかけて、丘陵や丘陵の下、丘陵にはさまれた谷部などに多くの集落や墓が営まれたほか、須ノ原台地の南側には、前方後円墳である城山古墳が築かれます。

在田郷の大部分に含まれるようになった古代には、その時代のものと考えられる町の坪、栗ヶ坪などの地名が現在に残っており、玖珠へ通じる古代の道と推定されています。

中世には諸留村を拠点とした師富もろどみ氏の名前や中世の終わりごろには大友義鑑よしあきに指名された八郡老の1人で有田川下流域の右岸一帯を拠点とする石松氏の名前を見ることができます。

近世の有田校区は玖珠・森藩くろしまの久留嶋氏くろしまの領地となり、日田代官所（永山布政所）と森藩を結ぶ道が通り、人々の行き来でにぎわっていたと思われます。

知っておきたい文化財

耶馬溪（一部）【国名勝】 （東羽田町）

耶馬溪は中津市を中心とした東西40km、南北35kmの範囲を指します。火山の活動による溶岩などが削られて作られた、山や岩の壁、川などの独特の自然風景をみることができます。日田市内では一尺八寸山の一部がその範囲に入っています。



有田校区の主な文化財

世尊寺木造薬師如来坐像・木造地藏菩薩立像 木造仏像残欠【市有文】（諸留町）

世尊寺は有田を治めた師富氏の居館の近くにあったといわれる寺で、現在はその跡に小さなお堂が建っています。これらの仏像はお堂の中に納められています。2体とも背中に舟形の光背と台座があり、薬師如来は座り、地藏菩薩は立ち、ともに高さは35cm前後です。像だけの高さは薬師如来像が16.3cm、地藏菩薩像は18.8cmです。

光背裏と台座の墨書きから1547年（天文16）年10月に、師富氏が7歳で亡くなった子どものために世尊寺内に建物をたて、その本尊として納められたことがわかります。



有田校区の主な文化財

いわとがく

磐戸楽【県無民】（三ノ宮一丁目）

いしまつだいぎょうじしゃ

石松大行事社で、天文年間（1532～1555）より毎年10月中旬に行なわれ、「河童踊り」の名で親しまれています。青年による棒使いと小中学生による河童舞いが演じられます。秋の実に感謝する収穫祭として親しまれています。

その昔、大原八幡宮の八幡様を乗せた馬が石松川を渡る際に河童が馬にいたずらをしようとして、逆に返り討ちにあってしまった姿を見て、八幡様が河童を助けたところ、喜んだ河童たちが踊ったものが、この磐戸楽の始まりと伝わっています。



有田校区の文化財

- ① 磐戸楽【県無民】
- ② 耶馬溪（一部）【国名勝】
- ③ 有田町若八幡社やっこ振り行列【市無民】
- ④ 世尊寺木造薬師如来坐像【市有文】
木造地藏菩薩立像
木造仏像残欠
- ⑤ 城山古墳【県史跡】
- ⑥ 平島古墳【市史跡】
- ⑦ おきあげ人形製作資料【市有民】

知っておきたい文化財

城山古墳【県史跡】（諸留町）

城山古墳は、須ノ原台地の南の端にある前方後円墳です。長さは29.9mあり、内部には箱形石棺があるとみられています。古墳が造られた時期ははっきりしませんが、前方後円墳が日田で作られるようになった時期、古墳時代後期の可能性が高いと考えられます。当時の有田地区を治めた豪族が眠っていると思われる。



平島古墳（諸留町） 【市史跡】

平島古墳は、有田小学校の南東にある天満宮の境内にある円墳です。天満宮の社殿を建設する際に、一部が壊されていますが、直径は約10m、高さは約4mであることがわかります。詳しい調査を行っていないため、詳細は不明ですが、この地域を治めた豪族のお墓と考えられます。





小野校区の文化財

小野川流域の源栄町・殿町・鈴連町・三河町から構成される小野校区は、日田市最北部に位置し、北は岳減鬼山・仏来ノ山などを境に福岡県田川郡添田町、大分県中津市山国町と接しています。中世の頃、小野校区北部は大肥荘に含まれていたと考えられています。

三河町には戸山山頂にある英彦山別社の戸山神社上宮の遥拝所である下宮（戸山神社）があります。鈴連町では、小野川を利用した水車が見られ、精米用箱水車など現在も稼動しているものが見られます。殿町にある溝口神社は、上小竹天満宮ともいわれており、日田郡八郡老の1人、佐藤山城守の時に造築されたという言い伝えがあります。源栄町では江戸時代中期に開窯され、約300年の歴史を持つ小鹿田焼があり、陶土を粉碎する唐臼（水車の一）の音が響きわたっています。

小野校区の大部分は杉などの山林地帯で、中央部北から南に流れる小野川に沿った細長い谷間に農家が点在しています。水田もみられますが、ナシの栽培が盛んで、上質の二十世紀・新世紀・晩三吉などが有名です。また北部の源栄町は、耶馬日田英彦山国定公園指定区域に属しています。広域農業開発事業として、乳牛飼育を主とする小野尾当団地・河内団地の開発がされています。

知っておきたい文化財



戸山神社【未指定】 (三河町)

標高706.8mの戸山をご神体とする神社です。平安時代頃より、多くの人々の信仰を集めていました。また江戸時代には、日田代官所（永山布政所）の鬼門（陰陽道で邪悪な鬼が出入りする方角として忌み嫌われた北東の方角のこと）に位置することから、代官所からも保護されました。戸山山頂には上宮、中腹には中宮があります。三河町の戸山神社は下宮で、戸山を拝むために設けられた遥拝所です。

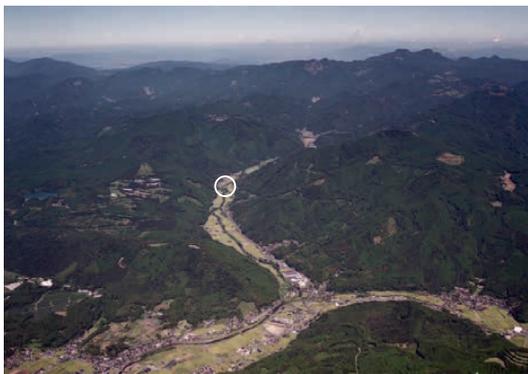
小野校区の主な文化財

小鹿田焼の里【国文景】（源栄町皿山・池ノ鶴地区）

日田市の最北端、大分県と福岡県との県境に位置します。小鹿田皿山・池ノ鶴地区は、北に彦山を控え、耶馬日田英彦山国定公園の南西部になります。皿山地区では、周辺の山から採取される陶土を利用した小鹿田焼の生産が行われています。水の力を利用して動く唐臼を用いて、周辺の山から採取した原土を粉碎し、水簸・乾燥を経て小鹿田焼の元になる陶土を作ります。成形には蹴轆轤が使われ、模様付けには刷毛目・飛び鉋・櫛目・指描き・打掛け・流掛けなどを用います。燃料には周辺から産出される杉材を用いて、伝統的な登り窯による焼成を経て焼物が完成します。池ノ鶴地区では、急峻な斜面に分布するプロピライト変朽安山岩を利用した石積みの棚田が形成され、「除け」と呼ばれる独特の水利システムによって営農が継続されています。「小鹿田焼の里」は、水・土・木等の資源を活かした窯業や農業といった生業が現在も続いており、皿山地区・池ノ鶴地区における生活の在り方を示す重要な文化的景観です。



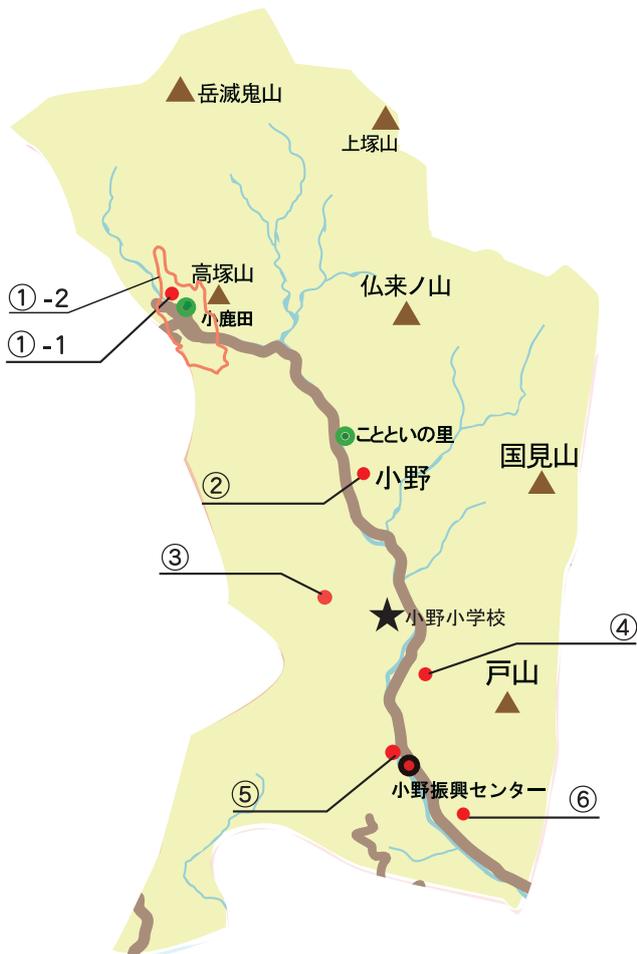
小野校区の主な文化財



① 小野谷（白丸が、小野川の阿蘇4火砕流堆積物と埋没樹木群の発見場所）



② 阿蘇4火砕流堆積物内で発見された多量の埋没樹林群



小野川の阿蘇4火砕流堆積物 及び埋没樹木群【国天記】（鈴連町）

阿蘇カルデラ（阿蘇山）は、過去に4回の大規模な噴火活動を引き起こし、現在私たちが見ることのできる阿蘇カルデラを形づくったのが今から9万年前の阿蘇4火砕流^{かさいりゅう}です。その規模は4回の噴火の中で最も規模が大きなものでした。この時の火砕流により、九州島の多くの木々をなぎ倒し、また400℃を超える熱風^{たいせきぶつ}によって、自然環境を一変させました。平成18年、小野川の発掘調査により火砕流による堆積物と埋没樹木群が見つかりました。調査の結果、小野川から見つかった埋没樹木群は、火砕流によってなぎ倒された森林が、火砕流によって運ばれてきて堆積したものでした。樹木群はヒノキ科・スギ・トウヒ属（マツ）の針葉樹を主体に、オニグルミ・ブナ属・ニレ属など10種類の広葉樹でした。この調査により阿蘇4火砕流の発生時期や経路、その威力や災害状況、当時の森林構成などが明らかになりました。



③ 阿蘇4火砕流の日田方面への流れ

知っておきたい文化財

夫婦岩観音
【未指定】
（殿町）



^{めづといわ}
夫婦岩観音は、今から約760万～480万年前（新第三紀中新世後期～鮮新世初頭）にかけて、火山活動による堆積物で形成された奇岩です。小野川上流では、九州の火山活動が本格化していく過程を示す地質がよく残されています。

小野校区の文化財

- ① -1 小鹿田焼【国無文】
- ① -2 小鹿田の里、池ノ鶴【国文景】
- ② 溝口神社（上小竹天満宮）【未指定】
- ③ 夫婦岩観音（小野川上流部の火山活動跡）【未指定】
- ④ 精米用箱水車【市有民】
- ⑤ 小野川の阿蘇4火砕流堆積物及び埋没樹木群【国天記】
- ⑥ 戸山神社（彦山別社）【未指定】



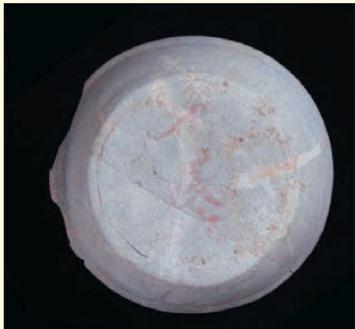
大明地区は日田市の北西端に位置し、古くから西の玄関口として、文化交流・経済流通の中継地でした。北の英彦山系の山々からもたらされた伏流水が鶴河内川・大肥川となって谷地の中央を流れ、南の筑後川へ注いでいます。豊かな水源のもと酒蔵(醸造元)が2つもあり、北の山々から南の平野まで起伏に富んだ自然豊かな土地です。大鶴と夜明で構成されており、さらに大鶴は大肥と鶴河内が合わさった名称です。平安時代に書かれた『和名類聚抄』にある日田郡の5つの郷のひとつ「夜開郷」があり、夜明の名は夜開郷から来ていると考えられます。また、中世には「大肥荘」と呼ばれ、太宰府天満宮に関係するお寺の土地となりました。

知っておきたい文化財

大肥吉竹遺跡 (朱墨土器) 【未指定】(大肥町)

ここからは珍しい「花度太」(門田)と書かれた土器が見つかります。

かつての国境に近く、人々の往来もあったため、この近くになんらかの公的施設があったのではないかと考えられています。



大肥遺跡【未指定】(大鶴町)

弥生時代から古墳時代にかけての集落の住居跡や甕棺墓、土器などの生活用具のほか、木製の鎧(木甲)も見つかっています。この鎧には漆が塗られており、当時の首長が使用したもので祭祀用として使われたと考えられています。



大明校区の主な文化財

行徳家住宅【国重文】 (夜明関町)

行徳家は代々医者の家系であり、幕末に活躍した元遂は眼科医のかたわら、民政にも力を尽くしました。宅地450坪、建坪60.17坪、一部二階建て。建造年代は1842(天保13)年頃と推定されています。

西側には山を借景とした庭があり、建築様式は、当時よく見られる曲屋形式の屋根と、土間を広く取った大庄屋の住宅です。



井上家住宅 【国登文】 (鶴河内町)

井上家は庄屋の一族として栄え、酒造業を営んできました。江戸時代後期から大正年間までの井上家の主屋、門、酒蔵、米蔵、味噌倉、納屋、石塀が残っています。主屋は林業が盛んであった頃の建築で、二階建て、檼瓦葺の和風住宅で外壁は木の枠組みを見せる洋風建築となっています。酒蔵と米蔵の外観は、漆喰壁の下に瓦を張った海鼠壁が特徴です。土蔵は1831(天保2)年に建てられました。この地域の豪農の佇まいをよく残す農家建築です。

大明校区の主な文化財

天満宮老松社【未指定】（大鶴町）

平安時代、日田を治めていた大蔵氏は、大明地区一帯を「大肥荘」として、太宰府天満宮の祭神である菅原道真のお墓があった安楽寺に土地を寄進していま



した。大鶴には下河内天満宮などの天満宮が多く残っており、境内には土俵もあります。天満宮老松社は1123（保安4）年に永季の子・宗季が造り、1242（仁治元）年に現在地へ遷ったと伝わります。

北山権現 磨崖梵字・宝篋印塔【未指定】（夜明中町）

室町時代ごろに造られたと考えられる石造物が残されています。絶壁の岩を四角に削って書かれた梵字は仏様を表しています。近くには宝篋印塔があり供養のために造られたものです。このほかにも小さな社や祠が点在しており、これらの信仰がいつからはじまったのか定かではありませんが、日々の暮らしの安全を祈願するために作られたと考えられます。この周辺は日田から福岡へ抜ける街道沿いで、人の目に触れやすい場所だったことも関係していると考えられます。



大明校区の文化財

- ①井上家住宅（主屋等7件）【国登文】
- ②行徳家住宅【国重文】
- ③大肥吉竹遺跡【未指定】
- ④天満宮老松社【未指定】
- ⑤大肥遺跡【未指定】
- ⑥小月橋【未指定】
- ⑦北山権現【未指定】
- ⑧関河岸跡【未指定】
- ⑨井上酒造店舗兼主屋【国登文】

知っておきたい文化財

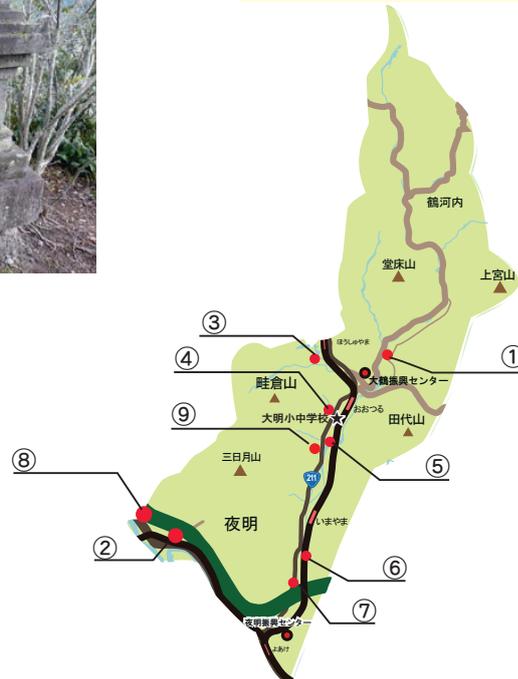


小月橋【未指定】（夜明中町）

昔から日田から福岡へ向かう人々の往来が多かったこの地に、1849（嘉永2）年日田の掛屋・廣瀬家、千原家・手島家や夜明の行徳家がお金を出して石橋を作りました。廣瀬淡窓も橋が完成したときに見に来れました。大きい方の歌詠橋（大月橋）はまもなく洪水で流されてしまいましたが、小月橋は今も残っています。

関河岸跡【未指定】（夜明関町）

日田・玖珠の幕府領で収穫された年貢米が一旦ここに集められました。かつて大きな蔵があり、蔵所跡もあります。村々の年貢の量が足りているかを役人と村の庄屋などが確認しました。確認できた米は船で下流へ運ばれ、長崎や大坂・江戸まで運ばれていきました。



石井校区の文化財

石井町を中心とした9町で構成される石井校区は、かつて5つの村が合併してできたことから「五和」とも呼ばれ、三隈川の南岸の日田盆地南西部に位置し、福岡県と接しています。奈良時代には高瀬や津江と共に「豊後国日田郡石井郷」に属し、「原の長者伝説」に登場する日下部氏がこの一帯を治めていたとされます。

大宰府と豊後を結ぶ主要官道があったこの一帯は日田の南の玄関口です。江戸時代には久留米から日田に至る日田往還として整備されています。この道には、^{いかたばめがねばし}筏場目鏡橋が架けられており、大正時代には石井を通る筑後軌道が併設され、軌道橋である^{さかさまだにばし}逆谷橋が今も残ります。

このように交通の要所であった石井地区には多くの文化財が残されています。串川沿いに発達した長者原台地には旧石器時代のナイフ形石器や縄文土器、弥生時代の環濠集落、古墳時代から奈良時代、室町時代の集落が発見された長者原遺跡、装飾古墳の穴観音古墳とその周りの崖面に見られる長者原^{よこあなほ}横穴墓、三隈川沿いには前方後円墳の護願寺古墳、円墳と思われる津辻古墳、隈山古墳、ガランドヤ古墳群などの多数の古墳群が見られます。さらに、戦国時代には三隈川と大鶴地区、日田盆地を眼下にのぞみ、戦いの拠点とするため高井岳に山城がつくられ、また江戸時代の村の様子が記された内河野村古絵図が残されるなど、当時の人々の活動を感じることができる地域です。

石井校区

知っておきたい文化財

筏場目鏡跡

【元県有形(指定解除)】

1806(文化3)年に内河野川に掛けられた県内最古の石造アーチ橋で、残念ながら、2012(平成24)年と2017(平成29)年の豪雨で流出しましたが、200年以上残り、当時の技術力の高さがうかがえます。

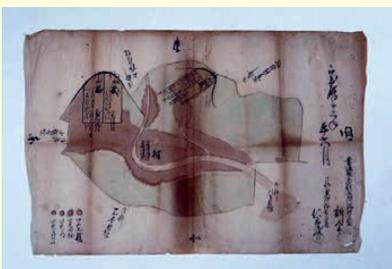


豪雨による流失前のようす

内河野村古絵図【市有文】

(北友田三丁目、埋蔵文化財センター)

1745(延享2)年から天保年間頃に代官の命により造られた絵図で、当時の道や川、建物や山林の様子などが描かれ、村の様子がうかがえる貴重な資料です。



石井校区の主な文化財

ガランドヤ古墳【国史跡】(石井町三丁目)

ガランドヤ古墳出土品【県有文】(北友田三丁目:埋蔵文化財センター)

三隈川南岸の段丘上にある、盛土を失った3基の円墳のうち、2基の横穴式石室の壁に装飾壁画が見つかった6世紀中頃から後半の古墳群です。1号墳は直径28.7mで、玄室(遺体を収める部屋)の奥壁に赤と緑の顔料で同心円文や人・馬・鳥・船などの模様が描かれています。2号墳は直径23mで、玄室全面を赤地に塗り、緑で同心円文や連続山形文、馬上で弓を引く人物などが描かれています。3号墳は直径10~15m程度の小型で、赤い顔料のみが確認されています。

石室からは葬られた人物の身分を物語る鏡や馬具、刀などの貴重な副葬品が出土し、これらの出土物から、2号墳⇒1号墳・3号墳の順番につくられたと考えられています。



石井校区の主な文化財

穴観音古墳【国史跡】（内河町）

長者原台地北西奥に位置しています。古墳北側の崖面には横穴墓群、周囲には5世紀代の石棺墓が多数発掘された長者原遺跡があり、古代の墓地が広がっていた地域にあります。6世紀末から7世紀初めごろの直径19mの規模の円墳で、周囲には溝が巡っていましたが、横穴式石室前室（遺体を収める手前の部屋）側壁や玄室奥壁に装飾壁画が確認されています。

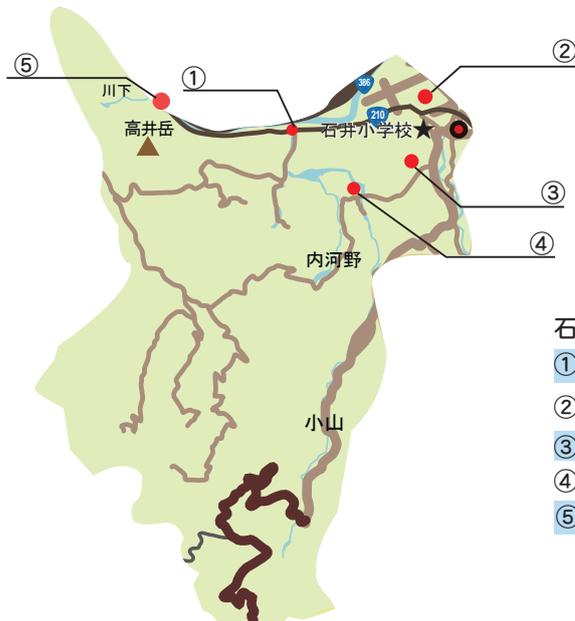
赤と緑を使った円文、両手を広げた人物、鳥、船などが描かれています。当地に残る原の長者伝説などから、日田の首長クラスの人物であったと考えられます。



石井神社銅矛【県有文】

（隈二丁目、日田祇園山鉾会館）

くにつくりのみやっこばのすくれ
国造止波足尼を祭ったとされる石井神社のご神体で、紀元前後頃の弥生中期末前後に造られた青銅器です。矛とは中国の武器の槍先ですが、弥生時代には祭器として司祭者が使っていたものです。この地区に有力な弥生集落があったことが想像されます。どの場所から出土したかは定かではありませんが、鎌倉時代に津江山の住人が掘り出したとされる金銅鉾2振りのうちのひとつではないかと伝えられる宝器です。



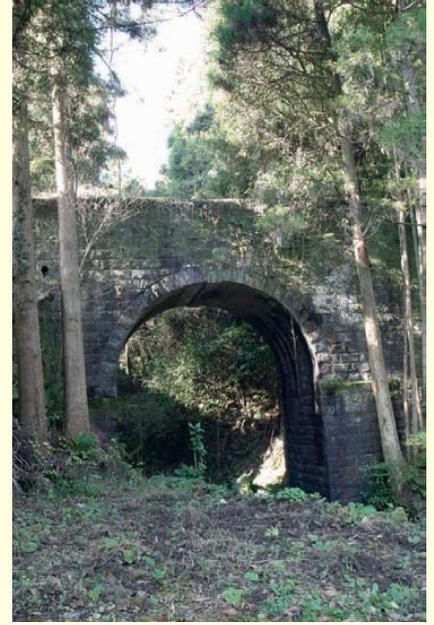
石井校区の文化財

- ① 筏場目鏡橋跡【元県有文(指定解除)】
- ② ガランドヤ古墳【国史跡】
- ③ 穴観音古墳【国史跡】
- ④ 内河野村古絵図【市有文】
- ⑤ 逆谷橋【未指定】

知っておきたい文化財

逆谷橋【未指定】（高井町）

大正2年頃に整備された豆田-久留米間を結ぶ鉄道である筑後軌道は石井地区を通っており、ガランドヤ古墳付近に駅があったとされます。当時の線路を通す橋架で、日田の近代化を示す数少ない遺産の一つです。



原の長者伝説

長者原の地名の由来となった伝説です。魔物に襲われた石井の豪族（日下部春里）の娘を筑後の国（久留米付近）の草野太郎衛門が助けて魔物を倒し、娘と結婚したという伝承で、同じ伝承が久留米市草野にも残っています。



前津江校区の文化財

赤石・大野・柚木から構成される前津江校区は日田市の南西部にあり、東から北にかけては大山町、北から西にかけては福岡県うきは市・同県八女市、西から南にかけては同市矢部村と日田市の中津江村と接しています。中津江村境に渡神岳（1150.2m）、福岡県境に釈迦岳（1230.8m）・権現岳（1209m）、星野村境に熊渡山（960.2m）などの高い山がそびえています。権現岳は御前岳ともいい、『日本書紀』景行天皇17年条に「前山を超えて」とあるのは御前岳のことと考えられています（日田造領記）。御前ヶ岳神社が祀られ、山頂に上宮、中腹に中宮、柚木の田代には下宮が置かれています。秋分の日のお祭りでは、1847（弘化4）年から大正時代末まで田代楽が奉納されていました。中世以来、上津江・中津江とともに太宰府天満宮の荘園である「津江山」を構成していました。産業は大正期から木材・木炭・茶・楮などが主体で、のち日田杉の産出で知られるようになりました。また現在は椎茸・トマトなど多様な農作物の栽培に取り組んでおり、畜産の振興や高山植物・杉林などの観光資源が豊富です。

知っておきたい文化財



大乘妙典經

（だいじょうみょうてんぎょう）

【市有文】（前津江町柚木）

この大乘妙典經（妙法蓮華經）は御前嶽神社に1715（正徳5）年に氏子が奉納したもので、妙法蓮華經8巻からなります。古くから御前嶽は靈山であり、山頂や中腹の岩屋を山岳信仰の対象として祀ってきました。

前津江校区の主な文化財

大野老松天満社旧本殿

【国重文】（前津江町大野）

大野老松天満社は1071（延久3）年に日田郡司の大蔵永季が作ったといわれ、旧本殿は雪ヶ嶽城主であった長谷部山城守信安によって1448（長享2）年に再建されたと伝わっています。

この旧本殿は、本殿の正面の柱と柱の間（柱の間の空間）が三間あり、本殿の前方の屋根が後方の屋根より長くなっています。また正面の庇に高床を張って前室的な扱いをしています。この旧本殿の構造を前室付三間社流造といい、九州でも最も古い中世神社建築で国の重要文化財に指定されています。



天井絵馬【市有文】

（前津江町柚木）

柚木老松天満社の天井には、スギ板55枚に描かれた天井絵馬があります。この絵を描いたのは、藤原種名で、江戸時代に活躍した狩野周信の一番下の弟といわれています。

絵馬の図柄には、草花や腕相撲をしている人、農作業をしている人、ひょうたんを抱える人、鶴、花木、鳥など様々な様子が描かれています。書かれた時期は享保期（1716～1736）と考えられますが、いつ柚木老松天満社に奉納されたかはわかっていません。

知っておきたい文化財



像代 (かたしろ【市有文】 (前津江町大野前津江郷 土文化保存伝習施設)

大野老松天満社の像代とはお祭りの際に御神体の代わりとして据えたもののことです。これらの像代は人の上半身を模して作られており、男女の像や表情豊かなものなどがあります。『豊後全史』や『豊後国志』などによれば、津江氏の三代目義胤が以仁王と長谷部信連（津江氏の先祖）を祭るときに先祖の代わりとして、木像の像代を据えたと伝わっています。現在は35体残っていますが、昔はもっと多く残っていたそうです。



ユズリハ自然林【市天記】 (前津江町大野)

大野老松天満社の背後にあるユズリハ自然林は、ユズリハを中心にタブノキ・ヤブニッケイ・イヌガシ・ヤブツバキ・アオキ・ヒサカキ・ネズミモチなどの樹木で構成されています。ユズリハは、春に枝先に若葉が出たあと、前年の葉がそれに譲るように落葉する様子を親が子を育て、家が代々続いていくように見立てた縁起物とされ、正月の飾りや庭木に使われています。



老松天満社懸仏 (おいまつてんまん しゃかけぼとけ) 【県有文】 (前津江町大野)

懸仏とは鏡面に仏・菩薩・明王・神像などの像を表したものです。10世紀頃から行われた鏡像が発展し、神仏習合の思想なども加わって平安時代から江戸時代に至るまで盛んに製作され、神社や寺に奉納されました。大野老松天満社の懸仏は、像の形が残っているものが160面、鏡だけになってしまったものが47面の計207面が残っています。これらの懸仏は肥前地方（佐賀・長崎）のものと似ていることから、北部九州地域で技術や文化の交流があったことがわかります。



大友書状 (おおともしょじょう) 【市有文】 (北友田3丁目、埋 蔵文化財センター)

柚木田代の長谷部家に伝わる大友義統の書状。この書状は豊後国の大名であった大友氏と中国地方の毛利氏が、北部九州を賭けて争った際に、大友氏の味方をした津江兵部丞の活躍を認めて送ったものです。その褒美として、大友家の当主である義統の「統」の字を与えて、統廣と名乗ることを許可しています。



前津江校区の文化財

- ① 天井絵馬【市有文】
- ② 大野楽【県無民】
- ③ ユズリハ自然林【市天記】
- ④ 大野老松天満社旧本殿【国重文】
- ⑤ 老松天満社懸仏【県有文】
- ⑥ 懸仏（御前嶽神社）【市有文】
- ⑦ 四季農耕図絵馬【市有文】
- ⑧ 像代（かたしろ）【市有文】
- ⑨ 逆修塔【市有文】
- ⑩ 台の殿様屋敷跡【市史跡】
- ⑪ 大友書状【市有文】
- ⑫ 百姓日記【市有文】
- ⑬ 桂の木【市天記】
- ⑭ 大乘妙典経【市有文】
- ⑮ 宝篋印塔【市有文】
- ⑯ どうぼう様（藤房様4体）【市有文】



津江校区の文化財

津江校区は筑後川の上流域である上津江町と中津江村からなり、日田市の南端を占め、上津江町は熊本県と、中津江村は熊本・福岡県と接しています。中津江村は江戸時代の^{とちばる}枋原村・^{しも}下野田村、梅野村・中西村がそれぞれ明治8年に^{とちの}枋野村・^{こうせ}合瀬村になり、その2村がさらに明治22年に合併して成立しました。上津江町は江戸時代の川原村と上野田村が明治22年に合併して上津江村が確立し、平成17年の合併で上津江町となりました。

この校区は大部分が山林で占められており、ここに暮らす人々は、木・石・土といった豊富な山の資源を使って暮らしてきました。中津江村では^{たのくち}田ノ口や^{やどころ}八所・^{おその}梅野・^{おの}宮園・^{まるぞう}小園・^{うら}丸蔵・^{にしきじや}市ノ瀬など村のあちこちで地元の黒曜石などで作ったやじりや斧が見つかっています。上津江町でも^{うら}浦や^{にしきじや}西雉谷をはじめとする町内各地で石器や縄文土器が見つかっており、両地区とも数千年もの昔から人が生活していたことがわかります。また時代が下って平安時代の終わりごろになると津江一帯は安楽寺（＝現在の太宰府天満宮）の領地となり、その影響を受けて、いくつもの神社が建てられました。深い山々に育まれた信仰や祭礼が、今も生活にしっかりと息づいています。

知っておきたい文化財

伝来寺庭園【県名勝】

(中津江村枋野)

寺伝によると建^{てんらいし}立は1338（延元3）年とも大永年中（1521～1528）ともいわれ、現在の本堂は1835（天保6）年に再建されたものです。本堂のまわりの雄大な石組や地形の素朴さは数少ない中世の地方庭園の例として貴重な資料です。



間地橋【市有文】

(中津江村枋野・合瀬)

合瀬と枋野の境を流れる梅野川にかかる石造アーチ橋で、1922（大正11）年、大山の石工によりつくられました。中津江村では唯一の石造アーチ橋として、大山石工の伝統的な技術を今に伝える文化財です。



津江校区の主な文化財

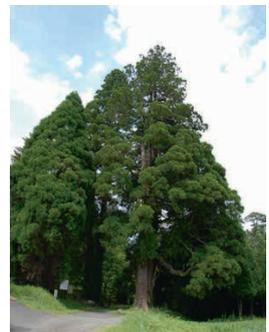
宮園津江神社の文化財（中津江村合瀬）

宮園津江神社は1023（治安3）年に日隈信弘により宮原に創建され、のちに宮園に移されたといわれます。八所・中村とともに津江七社のひとつとなっています。

津江神社のスギと自然林

【県天記】（中津江村合瀬）

参道などにあるスギは日田杉の元祖^{けいだい}といわれます。また本殿背後の境内林には広葉樹ウラジロガシ、尾根部には針葉樹ツガを主とする樹林が残っており、スギ山に植林される前の本来の森の状態を見ることができます。



老松様の^ま的^{まつり}ほがし祭【県無民】

毎年4月15日に行われる五穀豊穡や家内安全を祈る祭です。竹と紙でつくった^{ほこ}的を神主が神前に供えて矛で突いたあと、神前から下ろして人々が^{ほこ}的を射ます。祭礼に使われた弓・矢・^{ほこ}的は魔除けとして参拝者が持ち帰ります。



老松様の餅搗祭【県無民】

もとは小麦の収穫を感謝する祭といわれ、蒸した小麦を木臼^{うす}に入れ、餅搗き唄を歌いながら回り搗きをし、神前に供えます。最後の^{うす}臼は神前に供えずに暴れ搗きをし、終わると^{きね}杵を折り、参拝者はそれを持ち帰って魔除けとします。



津江校区の主な文化財

浦宮神社の文化財 (上津江町川原)

浦宮神社は1703(元禄16)年に合谷又兵衛により「老松社」として創建され、津江七社のひとつに数えられる、上津江町では由緒のある神社です。



浦宮神社境内地「樹林・ 下草シダ類」【市天記】

ご神木とされる大杉をはじめ樹齢400年もの杉木立のほか、シダ植物37種、裸子植物7種、被子植物262種など種類豊富な植物が見られます。



せり持ち式石橋

【市有文】

旧参道の途中の小さな谷にかかる石橋。左右両岸から台石を少し谷にせり出し、その上に細長い桁石5枚を重ねたもので、アーチではない珍しい石橋です。



津江校区の文化財

- ①津江神社のスギと自然林【県天記】
老松様の餅搗祭・的ぼかし祭【県選無民】
- ②中西村・梅野村の絵地図【市有文】
- ③間地橋【市有文】
- ④銀杏の木【市天記】
- ⑤伝来寺庭園【県名勝】
- ⑥クスの木【市天記】
- ⑦エドヒガンザクラの木【市天記】
- ⑧ムクの木【市天記】
- ⑨浦宮神社拝殿・神殿/せり持ち式石橋【市有文】
浦宮神社境内地「樹林・下草シダ類」【市天記】
- ⑩手水野のカツラ林【市天記】
- ⑪スギの木【市天記】
- ⑫モミの木【市天記】
- ⑬小平のカツラ林【市天記】

- ⑭イチヨウの木【市天記】
- ⑮十一面観世音菩薩坐像【市有文】
- ⑯西雑谷笠塔婆附、石造塔婆【市有文】
- ⑰先祖元・五輪塔【市有文】
- ⑱アカマツの木【市天記】
- ⑲モミジの木【市天記】
- ⑳年の神境内地伝、相垣越前守の墓【市史跡】
- ㉑木地師半兵衛・徳兵衛の墓【市史跡】

知っておきたい文化財



木地師半兵衛・徳兵衛の墓

(2基)【市史跡】(上津江町川原)

木地師とは木の椀や盆などの木工品をつくる職人のことです。明治初期までは天皇や幕府の許可を受けた職人たちが全国に存在したといわれ、この墓にも菊の御紋を略した印が見えます。谷を挟んだ東側の「雑谷」地名も、もとは「木地屋」「器地屋」と表記されていたといわれています。



西雑谷笠塔婆【県有文】

(上津江町上野田)

死後の利益のために生前に前もって行う仏事として、また老いた者が年若くして死んだ者の冥福を祈るために建てた石塔といわれています。1570(元亀元年)年の年号のほか、阿彌陀如来や観音菩薩・勢至菩薩を表す梵字(古代インドの文字)が刻まれています。

- ㉒御所跡と御所の谷【市史跡】
- ㉓菊池七人塚【市史跡】
- ㉔宝篋印塔【市有文】
- ㉕小竹供養塔【市有文】





大山校区の文化財

大山校区は日田市中心部、阿蘇を源として日田盆地に向かって北に流れる大山川に沿って広がる地域です。面積の約9割が山林で占められる山岳地帯で、大山川などの河川によってつくられた険しく美しい渓谷がいたるところで見られることから、川沿いは耶馬日田英彦山国立公園に指定されています。

大山校区はもとは大山・鎌手・都築の3つの小学校区でしたが、2012（平成24）年に合併して、全町で一つの大きな校区となりました。

大山町で最も古い人類の痕跡のひとつに、旧大山小学校付近の中川原遺跡があります。縄文時代（約4,000年前）の住居跡が見つかっており、その後の弥生時代や古墳時代にも大きなムラが形成されていました。奈良時代や平安時代には、日田盆地南部の石井地区の一部と見なされていたようです。戦国時代には、大友氏の家臣で直入町（竹田市北部）を本拠としていた田北一族の田北紹鉄が、大友氏の衰退に乗じて謀反を起こし、福岡県の秋月に逃げる途中で討たれた場所として、松原ダムのそばにお墓が残っています。

知っておきたい文化財

老松神社銅鉾【県有文】 （北友田三丁目、埋蔵文化財センター）

老松神社の宝物とされる全長約70cmの銅鉾で、弥生時代（約2,000年前）のものと考えられています。箱書きには筑後方面から奉納されたとありますが出土地は不明で、鎌倉時代（約700年前）の歴史書に記録のある「大山・津江で出土した金銅鉾2本」のうち1本とされています。



大山校区の主な文化財

烏宿山の文化財（大山町西大山）

大山町のほぼ中央にある烏宿山は周囲の山から独立したところですが、そもそもは女人禁制の修験霊場であり、山頂の烏宿神社は創建から1,000年以上の歴史をもつといわれます。神社周辺の自然林は150種もの樹木が見られることから市の天然記念物に指定されています。



烏宿神社鰐口【県有文】

鰐口とは神社仏閣のお堂の前に太い綱とともにつるしてある鈴の一種で、お参りに来た人が綱を振って打ち鳴らします。鈴を平たくつぶしたような形です。表には「1409（応永16）年に文興という人物が奉納」、裏には「1505（永正2）年に大蔵永家が新たに寄付したことが書かれています。



烏宿神社「はだか参り」【市無民】

霜月祭りの前日、毎年12月14日夜に行われる、締め込み姿の男衆が参道をかけ上がり五穀豊穡や無病息災を願う祭事です。江戸時代の大飢饉のとき、参道の「御池」の水を田にまくと虫が発生せず、米ができ、餓死者が出なかったことに感謝した地元の若者が、裸で参拝したことに始まるといわれます。

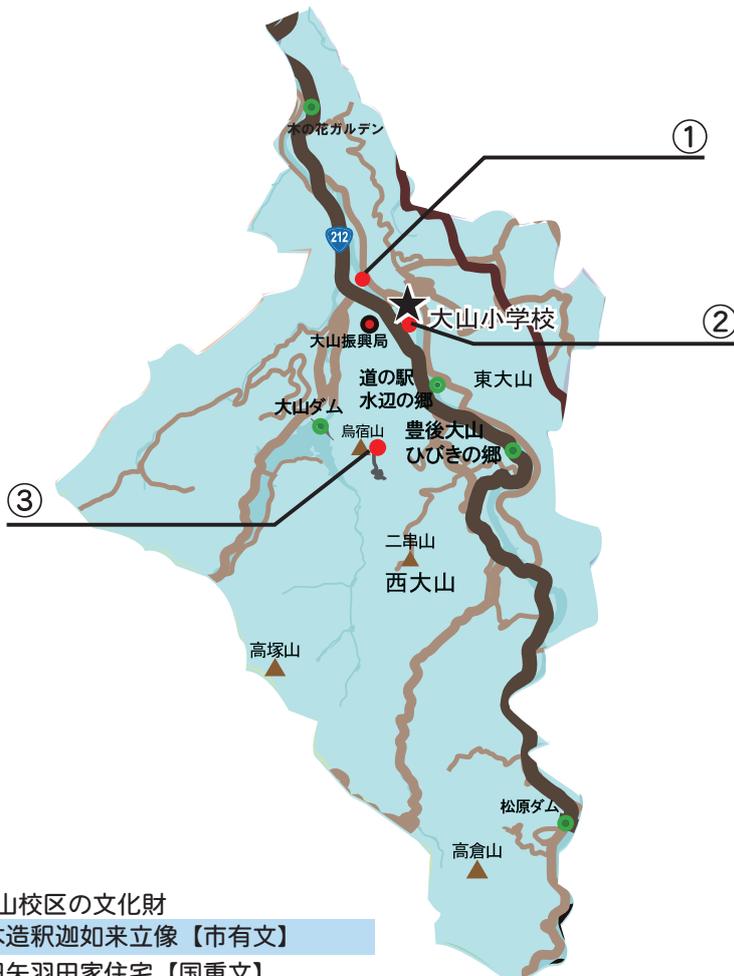


大山校区の主な文化財

旧矢羽田家住宅【国重文】(大山町西大山)



18世紀後半(約250年前)建築とされる江戸時代の民家で、屋根の形に特徴があります。屋根の峰がコの字となる「くど造り」という形式です。筑後川沿いに多く見られるこの形の民家としては最も東にあるものです。もとは東大山こいつまにありました。保存のために現在地に移されたもので、昔はこのような形の家が何軒かあり「舟並び」と呼ばれていました。「くど造り」の民家としては県内で唯一現存するもので、たいへん貴重です。 ※くど=かまど



大山校区の文化財

- ①木造釈迦如来立像【市有文】
- ②旧矢羽田家住宅【国重文】
- ③鳥宿神社鰐口【県有文】
- 鳥宿山自然林【市天記】
- 鳥宿神社「はだか参り」【市無民】
- ④森家五部大乘教【県有文】

知っておきたい文化財

木造釈迦如来立像【市有文】

(北友田一丁目、郷土史料館)

片瀬古かたせこの釈迦堂に長年安置されていた鎌倉時代(約750年前)と考えられる如来像です。釈迦堂のそばには「伝真庵でんしんあん」(廃寺)があったといわれ、この像も伝真庵の本尊だった可能性があります。付近に「でしなん」という地名が残っています。高さ約66cm。



森家五部大乘経【県有文】

(宇佐市：大分県立博物館)

五部大乘経とは、天台宗(総本山：比叡山延暦寺)で重要とされる華嚴経・大集教・大品般若経などの5つの經典です。小切畑のお堂から見つかったこの經典は、虫害などにより欠損が多いものの、箱には「応永23(1416)年」の年号が記されています。この時代に、大山に天台宗の寺院があったことをうかがわせます。



大山町の古い地層と化石【未指定】

今から約250万~100万年前、九州島を南北に引き裂こうとする地球の力により、大山町一帯は陥没して大きな湖となりました。綿打地区ではこの時代にできた地層の中からカエデなどの植物やコイなどの淡水魚の化石が見つかることがあります。このことを証明していません。

